Newest Uedi Cation for Heartdisease

最新心臟病治療法

名心臟病自宅療法

東京 博愛藥院發行

博愛藥院 正三位 伯爵 東久世通禧 題字
正二位 伯爵 久我通久 題字
従一位 侯爵 大山巌 題字

倉原重彌 朝倉太郎 著

特117
131

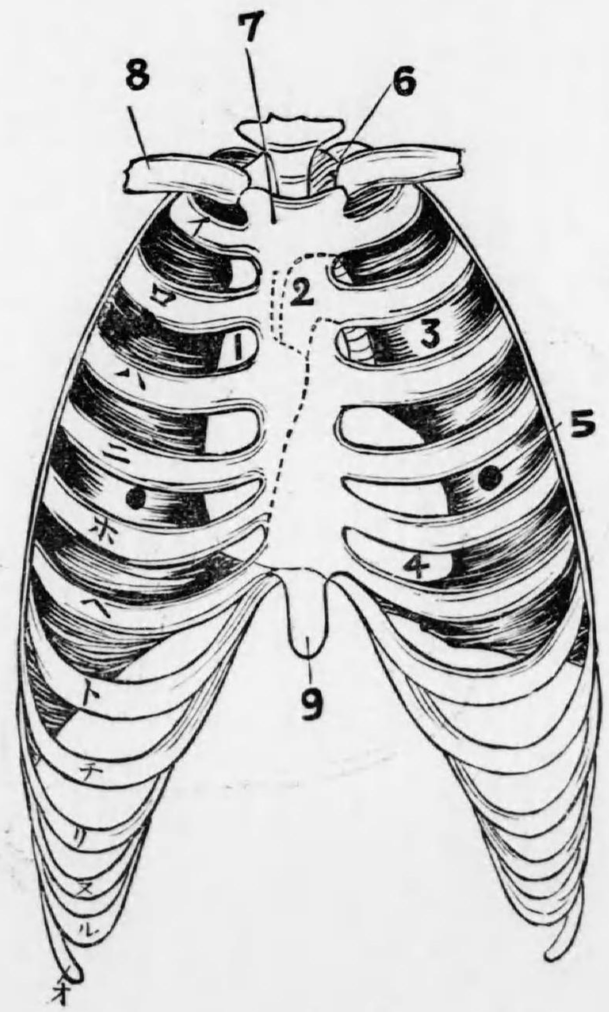
始

從一位侯爵久我通久閣下題字眞筆

伯爵東久世通禧閣下題字眞筆

伯爵大原重朝閣下題字眞筆

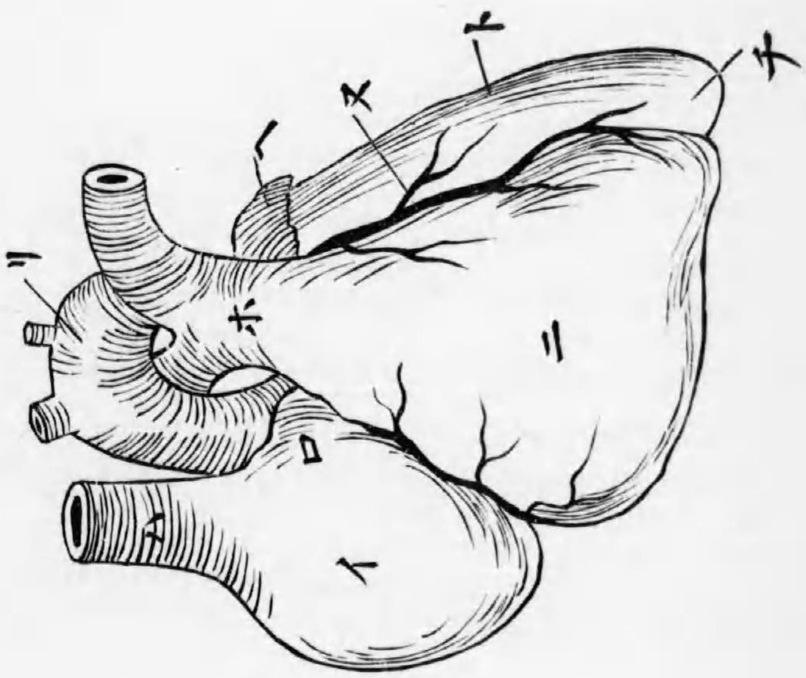
胸廓全圖



1 上大靜脈
2 大動脈
3 肺臟
4 心尖
5 孔腺
6 肺尖
7 胸骨
8 鎖骨
9 劍狀突起

イより
オ迄は肋骨

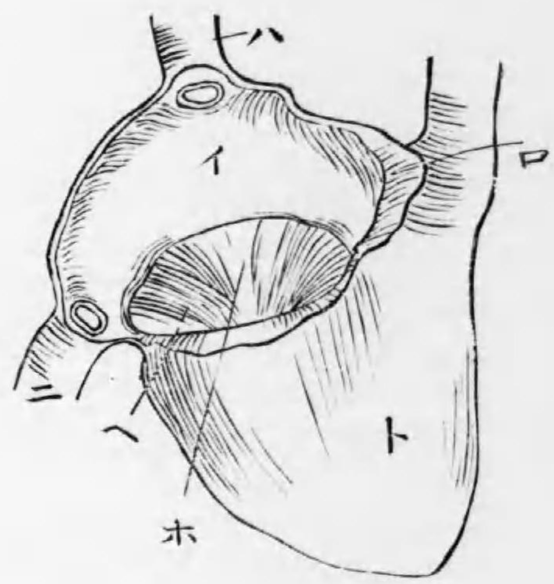
圖全臟心



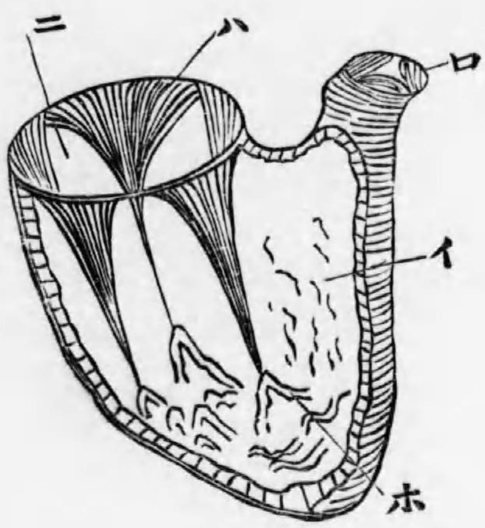
イ 右房　ロ 右心耳　ハ 上大靜脈　ニ 下大靜脈　ホ 右房室孔　ヘ 右房室辨　ト 右室

ヌ 心冠動脈　リ 大動脈弓　チ 左心尖　ト 左心耳　ヘ 肺動脈　ホ 右室　ニ 右心耳　ハ 上大靜脈　ロ 右心房　イ 右房

A 右房ノ斷面



B 右室斷面



イ 右室　ロ 肺動脈　ハ 右房室辨　ニ 右房室孔　ホ 孔嘴筋

露光量違いの為重複撮影

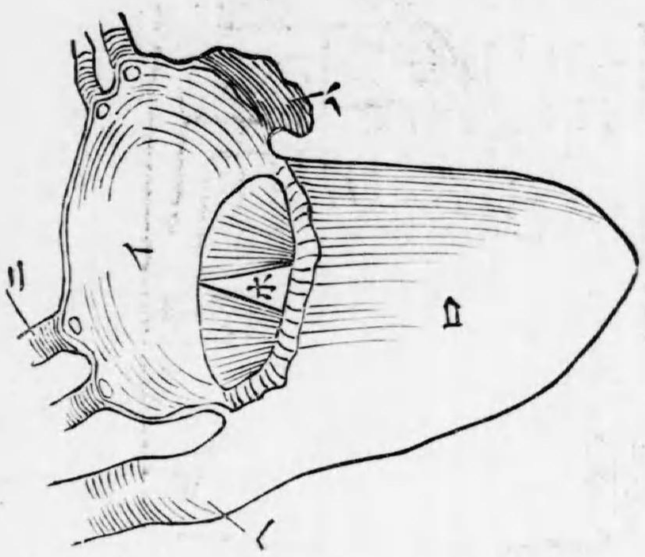
新版 心臓病治療法

目次

一 心臓は身體中一番大切な處……一頁
二 血液の循環……三頁
三 心臓の動き……八頁
四 心臓病の種類……一〇頁
五 心臓病の原因……一二頁
六 心臓病に起る症候……一六頁
七 心臓病と他の病氣との關係……一九頁
八 心臓病とエンボリー……二一頁
九 心臓病と他の病氣との區別……二五頁

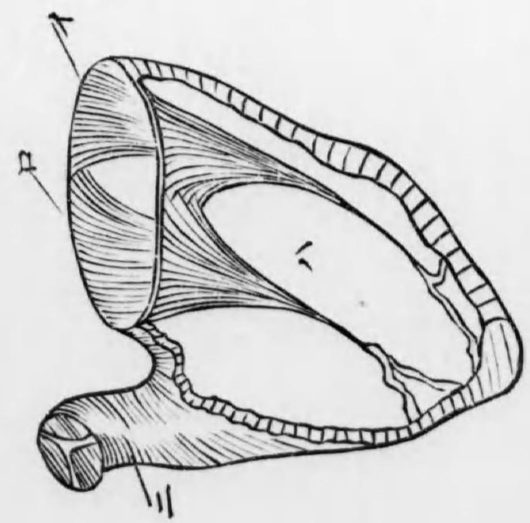
大正 1.11.7 内交

A 左房ノ斷面



イ 左房
ロ 左心耳
ハ 左室
ニ 肺動脈
ホ 左房室孔
ヘ 大動脈

B 左室ノ斷面



イ 左房室孔
ロ 右房室瓣
ハ 左室
ニ 大動脈

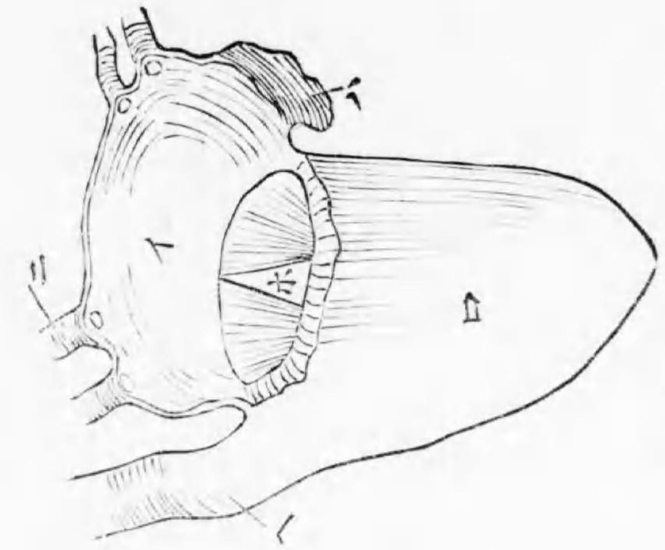
露光量違いの為重複撮影

最新心臟病治療法

目次

一　心臟は身體中一番大切な處……一頁
二　血液の循環……三頁
三　心臟の動き……八頁
四　心臟病の種類……一〇頁
五　心臟病の原因……一二頁
六　心臟病に起る症候……一六頁
七　心臟病と他の病氣との關係……一九頁
八　心臟病とエンボリー……二一頁
九　心臟病と他の病氣との區別……二五頁

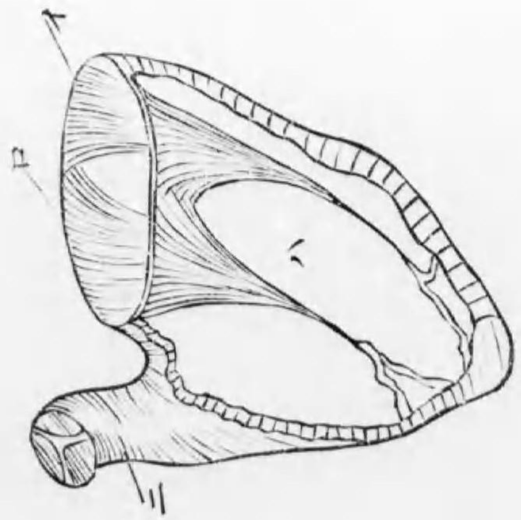
大正11.11.7 内交



左房ノ斷面

A

イ　左房
ロ　左心耳
ハ　左肺動脈
ニ　左房室孔
ホ　大動脈



左室ノ斷面

B

イ　左房室孔
ロ　右房室瓣
ハ　左室
ニ　大動脈

一〇 心臓病の豫防法……二七頁
一一 心臓病は癒るか癒らぬか……二九頁
一二 代償機能の説明……三二頁
一三 心臓病者の攝生法……三五頁
（一）榮養療法 （二）飲酒煙草の害 （三）茶コーヒの害 （四）刺戟物の害 （五）入浴の注意 （六）房事を慎め （七）結婚に就て （八）運動に就て （九）感冒と便秘 （一〇）深呼吸は心臓を調節す （一一）精神の安靜 （一二）最も注意すべきこと
一四 心臓病の治療法……五八頁

最新心臓病治療法目次終

最新心臓病治療法

（一名心臓病自宅療法）

○心臓は身體中一番大切な處

打ち見る所顔の色が蒼白く、少しの坂路を登るにも呼吸切れがして途中で休み〳〵せねば登り盡せぬと云ふ樣な人で、どうも私は心臓が惡くて困りますなど云ふはよく聞く處の言葉であるが、さて其心臓と云ふものは何處にあるものであらうか、心臓が惡いとはどんなことを云ふであらうか、心臓病と云ふものは急に癒らぬものであらふか。

一體心臓と云ふものは、血液と云ふ生命の泉を汲み入れては汲み出し、全身隅から端まで隈なく行き渡らせて、身體各部の營養を保たせる所の生活上須要の一機關である、腸や胃は一週間や二週間は之を休ませて置いても一向平氣なもので、昔イエスキリストが四十日四十夜飲まず食はずの修業を積んだと云ふことである、敢てまた古きを尋ねずとも今も下總の成田山に行けば斷食お籠りの善男善女は澤山に居る、斯樣に腸胃には休息を與へても少しも差支は無いが、心臓に至つては片時瞬時もこれを休ませる譯には行かぬ、若し心臓の機能にして一朝停止することがあれば何人と雖も死を免れぬもので、凡そ活きとし

活ける者の生命の鍵は實に心臓の中に秘藏されてあると云ふても差し支へが無く、其人の活潑なるも不活潑なるも、健康なるも健康ならぬも、少し働いて疲れるも、多く働いて疲れぬも、總て心臓の具合の良否、即ち心臓の健康なると病氣なるとに關するもので實に心臓は身體中一番大切な處であるのだ。

○血液の循環

心臓の大切なのは、堪えず血液と云ふ生活の泉を循環せしむる爲めて、血液の循環の元は左の乳の下深く胸廓内に位する處の心臓である、心臓の中にはシキリがあつて左右二つの室

と二つの房とに分れて居るが、血は其の左の室から出初めて全身を循れば今度は右の室に歸るのである。左の心室から出た血は初めは一本の太い血管を通りて行くが、其血管より漸次に枝を生じて、枝には枝が出來て漸次に髮の毛程に細くなるが、皮膚の表面や内臓に行くころになれば、それが又分れに分れて遂には顯微鏡で見なければ分なぬ程の毛細血管となるのである。それから先きに此血管を通じて身體の内外限なく行き渡つた處の血は、歸る時には今度は別の血管を通つて、それが前とは丁度反對に細いのから段々と太くなり、漸次合併して肝臓と云ふ大切な臓器を通りて、終に心臓の右房に入り更に右室に歸り、

此處からまた出でゝ肺臓に行き、肺臓からしてもとの心の左房に行き次に左室に歸るものであつて、これを血液の一循環と名づけて居る。

血液が初め左室から出て行くときには動脈と云ふて、酸素と滋養分とに富んだ鮮紅色のものであるが、身體中を廻り循りして居る間に其酸素や滋養分を諸臓器に與へ、其歸り途には胃や腸によりて消化された滋養物を澤山に擔ぎ込み、これから又筋肉や腦などからして一日の仕事で溜つた所の勞癈物をも受け取つて、自身は炭酸瓦斯の爲めに暗青色なる靜脈血となつて肝臓に來れば茲で先に胃腸から賴まれた滋養物の荷を下すのであ

る、すると肝臓は其荷を受け取つて之を精製して身體の役に立つ様に作り、今日必要の部分は再び血液に頼んで身體中に分配せしむるが、若し餘分があれば之れを他日の用意にと貯藏し置くものである。

さて肝臓に滋養物の荷を下した血液は、身體中の勞癈物殊に炭酸瓦斯の荷は、更に之れを肺臓迄運び込む、すると肺臓は呼吸作用によつて炭酸瓦斯をば外界に放散して新たに酸素を受取つて血液に與へる、これによつて血液はまた生命の黄金なる動脈血となつて肺臓を出でゝ心の左室に歸り、再び身體中を循環して用意するのである。

斯様に血液の任務は多く、往復の道路が複雑で然も長途なるにも係らず、全身を一週して歸り來る時間は僅かに廿二秒間である、即ち一分間に約三回、一時間に百八十回、一晝夜二十四時間には、實に四千三百二十回を循るのである、盈も正月も乃至大祭日も無く主人公の身體は寢て居やうが、休んで居やうがそんなことには一向頓着なしに、我々が生とし活きてる間は唯の一瞬間も休みなしに一生懸命に働く處の忠僕である、御蔭で我々は生命を持續して行かれるので、昔から云ふ「血は生命の基なり」とは實に千古不磨の金言であるのだ。

○心臓の働き

血は前に云ふが如く非常に勉強して全身を循り歩くのであるが、之れを循らしむる働き即ち原動力は、主もに心臓によるのである、之れを譬ふれば心臓は「ポンプ」の如く、血は之より押し出さるゝ所の水のやうなものである、そして心臓の「ポンプ」は其人々の拳位の大さか無いけれども其働きは非常に強いものであつて、一分間に六十回から七十回以上（身體の短小なるもの程此數は多い）伸び縮みして、其一回の伸縮毎に四勺弱の血液を一間の高さに抛げ上ぐる働きをする、そして之

れが日夜休み無しであるから今之れを一晝夜に換算すると、九千石の水を三尺の高さに抛げ上ぐるだけの働きをすることになるのである、大きさから云へば僅かに其人の握り拳位しか無い處の心臓は、夜も日も寢ずに休まずにそれ丈けの仕事をして、明くる日も、其次の日も未來永劫に渡りて、疲れず休まずに働くのである、人間は實に此血と心臓の働きとによつて活きて居るのであるが、例令血液がいくら働きがあると云ふても、此心臓なる原動力が無かつたならばとても其任務を果すことが出來無いと同時に、また此心臓に故障があつた場合、病氣のあつた場合には、其故障の大小、病氣の強弱に應じて其れ丈の支障

は全身に起るのであつて、我輩が劈頭第一に心臓は身體中一番大切な處と喝破したのは此理由によるのである。

○心臓病の種類

さて心臓の大切なことは分つたが、今度は不幸にしてこれが病氣に罹つたときにはどうなるかと云ふことを述べて見よう、併し心臓が惡いとか、心臓病とか一口に云ふても其れは色々種類があるから、先づ其種類を擧げて見よう、第一は心筋質炎と云ふて心臓筋肉の病氣でこれには慢性と急性とあるが、よく梅毒などの爲めに起る病氣である、それから心胸絞窄痛、神經性

心悸亢進、此二病はヒステリー、神經衰弱患者に多い、次には心嚢炎、心嚢水腫、心嚢氣腫と云ふてよく癌腫などから來るやつで多くは不治の症、其次には急性及び慢性の心臓内膜炎、僧帽辨閉鎖不全、僧帽辨孔狹窄、三尖辨閉鎖不全、三尖辨孔狹窄、大動脈辨閉鎖不全、大動脈孔狹窄、肺動脈辨閉鎖不全、肺動脈孔狹窄、先天性心臓辨膜病等の數種あるが、此内最も多いのは辨膜障害で、辨閉鎖不全と孔狹鎖とは必らず相伴ふものである、また其障害の内最も多いのは僧帽辨の閉鎖不全で、其次に多いのは大動脈辨閉鎖不全である、で俗に云ふ心臓病、或は呼吸が切れるとか、動悸が劇しいとか云ふ所の心臓病は皆此辨

膜障害であつて、此辨膜障害に對する手當、治療法を知つて居れば心臓病に對する手當、治療法の總ては盡せるものである、尤も癌腫等より來る心臓病は、これは今日の醫學の智識にては到底癒すことが出來ないからしてこれは別物である。

○心臓病の原因

處て今度は心臓病は何が爲めに起るかと云ふに、一体辨膜障害なるものは、心臓内膜炎に續發するもので、辨膜障害が始めから起るものは無い、尤も先天性の辨膜病は別である、で心内膜炎の原因は何かと云ふと、一番に多いのはリウマチスである、

これは殊に急性の關節リウマチス後に、急性心内膜炎を起してゐれから辨膜に障害を及ぼすと云ふのは殆んど十中の八九さうである、寒い山國のリウマチス病の多い處に心臓病者の多いと云ふのはつまり此關係から來たのである、次には窒扶斯、猩紅熱、産褥熱、膿毒症、天然痘、實扶垤里等の熱病から心内膜炎を起して遂に辨膜病となるもの、三には黴毒、淋病等が原因するもの、慢性の腎臓病から起るもの、それから廣汎性動脈硬化と云ふて飲酒、黴毒等の爲めに動脈が硬化して、其硬化が遂に心臓にまで及んで、遂に大動脈辨閉鎖不全を來たすものもあれば、またこれぞと云ふ原因なしに初め心臓に慢性の内膜炎を起

して其結果何時の間にか辨膜病となるものあり、また稀れには畸形性關節炎と云ふて手足の指に畸形を呈せしむる所の一種のリウマチスからして心臓病となるのもある。

後天性即ち生後に罹る心臓病の原因は右に擧げた數ケ條に止まるが、此外に一種先天性心臓病と云つて生れ落ちると直ぐ、否な生れぬ前からして業に既に心臓に故障のあるものもあるが、これは身體がいかにも弱々しく、全身の發育が不完全で、榮養も惡く、二十歳位になつても、他の十二三歳の子供位の體格にも劣つて、恰も日影の草の如くいかにも弱々しく見えるのである。

心臓病はまた遺傳するものである、遺傳とは親の病氣が其子供にも傳はることで、親に心臓病があれば矢張其子供にも亦心臓病を發するものであるから、此點はよく注意して心臓病者は根治療法を行い、以て此忌しき病氣を子孫に傳へぬ樣にせねばならぬ、遺傳の實例に就ては、栗本博士は其父に心臓病ありて其子女五人の内三人は心臓辨膜病、殘りの二人は特異性の心臓肥大に罹つて居るのを實驗したと云ふことであるから、實に恐るべきことであると云はねばならぬ。

心臓病は男女何れに多いかと云へば概して女に多い、さうして分娩後はこれに罹り易いやうである、其理由は充分には判ら

ぬが、姙娠中には心臓は平素よりは過度に働いて疲勞して居るのと、産後にはリウマチスや其他の病毒が侵入し易いからであらう、それから年齢の關係はどうであるかと云ふに、これは老人にも來れば、幼年の子供にも起ることがあつて其關係は判然して居らぬ。

○心臓病に起る症候

心臓病に罹ればどうなる乎、即ち心臓病の症候はどんなものであるかと云ふに、此病に罹ると第一に心病の部分即ち左の乳房の所は少しく膨隆の傾きがある、殊に胸廓の薄弱なる子供の

心臓病なれば衣服を着けて居ても判る程突出して、其部分の動悸が亢まつて來る、時としてはまた心窩に動悸がすることもあり、心臓に手を當てゝ見ると、猫喘音と云つてゴロ〳〵と猫の喉を鳴らすやうな音が手に觸るゝことがある、ろして何となく食物の消化が惡くなり、頭痛がしたり、眩暈したりするが、此際に醫者に罹れば兎も角さも無いと、何だか身體の工合が惡いと思ふ位でまだ心臓病とは氣附かずに居るが、さうする内に少し運動すると動悸が高まる、呼吸がきれる、呼吸困しくなると云ふ風になれば自分乍らも心臓が惡いと氣が附く樣になるが、それから先は喘息にでも罹つたかの樣にヒドク咳嗽が出る

胸に痛みがあり、又は心臓を窄められるやうな苦痛を感じたり、心窩にもまた痛みを發する、時としてはまた關節や筋肉にリウマチスのやうな痛みを起すこともあれば、顔や手足が青紫色のイヤな色になり、段々重くなると今度は心臓から遠い處の足の胛から浮腫始めて、次に手の先きや顔が腫れて來る、お腹に水が溜まつたりする、それから次には欝血と云ふて身體の處々に血が滯る爲めに、手足、口唇、鼻翼、兩頰、爪の先きなどの外面から見ゆる處が紫色になると同時にまた身體内部の諸臓器にも欝血を起してそれ〳〵の障害を呈することになる。

○心臓病と他の病氣との關係

我々普通大人の身體中には約二升五合程の血液があつて、これは餘りもしなければまた不足でなく、身體の諸臓器を循りて之を養ふには丁度一杯になつて居る、これは前にも云ふ通り心臓のポンプ作用で送り出して居るが、一旦心臓病にかゝると此送り出し作用が充分で無いので或處には血液の充分に行き渡らない處も出て來れば、また或塲所には餘計の分迄溜まる、即ち欝血を來たす所も出來て來る、血の不足なのは貧血で、胃腸に貧血すれば消化呼吸が不充分になつて胃腸病になる、子宮や卵

巣に貧血すれば婦人病となり、腦に貧血すれば腦貧血から今流行の腦神經衰弱、ヒステリーとなり、手足に貧血すれば今度はリウマチスになると云ふ風に其貧血の塲處によつて種々なる病氣を起すことになる。

血の循りの不足なのは斯くの如く種々の病氣の基となるが、其反對に血の循りが多過ぎて鬱血すると、これは俗に云ふ惡血で、また種々の障害が起る、肩が凝るとか、脊中が凝るとか、足が張つて歩けぬとか云ふのは皆鬱血であつて、胃腸に鬱血すれば胃腸加答兒を起して食慾不振、嘔吐、便秘又は下痛を來たし、肺臓に鬱血すれば咳嗽、略痰等丁度氣管支加答兒のやうな

症候を呈し、肝臓に鬱血すれば黄疸を呈する等、過ぎたるは尚ほ及ばざるが如しの古語の如く、鬱血もまた貧血と同樣の障害を來たすものである、また若し心臓自身に鬱血が甚しく起ると、遂には心臓麻痺と云ふて一瞬間に生命を失ふことになる實に心臓病の及ぼす處の範圍は廣く、其害も亦甚だ恐るべきものである。

○心臓病とエンボリー

心臓病の經過中にはまたエンボリーと云ふものを起して恐るべき結果を來たすことがある、一体我々の血管は、其中を血液

が間段無く循環して居れば、決して其處に澁滯を來たすもので無いが、若し何等の原因があつて血管の內膜炎に罹るとか、或は辨膜病にかゝつて血液の循環が惡くなると血栓と云ふ血の凝りが血管の內膜に出來るものである、血管內膜炎の場合には其內膜炎のあつた場所に血栓が出來るが、心臓辨膜病の爲めに出來る血栓は血管の何れを問はずに、出來るに都合のよい所に出來る、從つて心臓の中に出來ることもあれば、或はまた靜脈の中に出來ることもある、殊に下肢の靜脈は壓力が弱い丈けそれ丈けどうしても餘計に出來たがるものである。併し血栓はよし出來たにしても、其の出來た所は附着して居れば、唯少し

血液の循環に支障ある位のことで、大した障りも無いが、若しそれが剝離する、或は一部分剝離して血流と共に循環するやうなことになると、それこそ大變である。

動脈管は元の心臓の方は一番に太く、それから先は段々と細くなつて行くのであるから、動脈中に出來た血栓が剝離されて血流と共に循ると、最初は樂に流れて何等の支障も無いが、段々に流れ流れて、細い血管に至り、其血栓の大さよりも小さい處に行くと、これより先きへはどうしても行くことは出來ないので、そこへピタリと止まつて了ふ、從つて其先の血液の循環が止まることになる、これが即ちエンボリー（栓塞）と云ふも

ので、若しそれが下肢の動脈に起れば急に電撃様の疼痛を發して、其下肢が全く動かなくなる、そしてそれが恢復することが出來なかつた場合には其下肢は軟化と云つて遂にば腐つて了ふことになる、上肢にエンボリーが起つても矢張それと同樣の結果になる、また内臓に起つても矢張同樣であつて、肺にヒッカゝれば肺のエンボリー、腎動脈に止まれば腎エンボリーとなるが殊に恐るべきは脳のエンボリーて、若し脳の大血管にエンボリーが起れば電光一閃卒中と同樣の症狀を呈して卒死して了ふ、また幸ひに小さい血管とあると、卒死するまでには行かないて一時卒倒した後に覺醒して全身不隨症を殘すものてある、また

脳エンボリーの爲めに脳の軟化を來たすこともあり、或は眞の卒中の如く、脳に出血を起すこともある、これはエンビリーよりも、大動脈辨閉鎖不全の爲めに、血液が多く脳に集つて遂に血管を破裂せしめて出血に至らしむることが多い、そして其前徵としては、ヒポコンデリーのやうに沈欝に陷ることがある、何れにしても此エンボリーは心臓病の併發症中最も恐るべきものてある。

○心臓病と他の病氣との區別

心臓病に罹ると第一に表はれ來るのは、動悸の劇しいのと、

呼吸の切れるのと、それが續いて浮腫が來る等であるが、此等の症候は獨り心臓病に特有のものでなくまた他の病氣にも來るものである、假へば全身貧血があるとか、虚弱な人にあつては矢張少しの坂路を登つても動悸が劇しくなり、呼吸も切れるが、心臓病の爲めに起るのは此際に心臓部に手を當てゝ見ると、前に症候の處で述べた、ゴロ〳〵と猫の喉を鳴らす樣な音が聞えるので分る、それから浮腫は腎臓炎の時にもあるが、これは一番先きに顔面から浮腫始める、脚氣の浮腫は下肢殊に膝の下の前脛骨部から始めて、顔面にまで浮腫が來る頃になれば餘程の重症で迚も歩行などは出來ぬ程になるが、心臓病の浮腫は前に

も云ふが如く足の胛から浮腫出して、次で手の先きや顔が腫れて來る、斯樣な病氣には色々似寄つた症狀が顯るゝのであるから、此鑑別法を知ると云ふことは、病のまだ重からざるに治療する、所謂病膏肓に入らざる内に、其病に適應する治療を講ずる上に於て最も必要なことである。

○心臓病と豫防法

所で今度は心臓病は斯樣に恐るべきものであるからどうかしてこれを未發に豫防する方法はあるまいかと云ふに、外の病氣の樣に身體の抵抗力を強めるとか、或は豫防血清を注射すると

か云ふ完全の豫防法は遺憾ながら無いのである、尤も心臓病、即ち辨膜障害は多くは、急性關節リウマチス後の心臓内膜炎に續發するから、成るべくリウマチスに罹らぬ樣に注意し、若し不幸にしてリウマチスに侵されたる場合には、心臓内膜炎を豫防すると宜しいが、悲哉此豫防法も完全の方法は未だ發見されないから、矢張、リウマチスや心臓内膜炎等に罹つた場合には、充分に、然も適當なる治療法を講ずると云ふより外に致し方はありませぬ。

（リウマチス病には最新の良劑キユーアあり）

○心臓病は癒るか癒らぬ乎

次に心臓病は癒るか、癒らぬかと云ふに、これには癒るのもあれば、癒らぬのもあり、また癒ると癒らぬとの中間にあるものもある、とこういふと、それは獨り心臓病に限らず、何病氣でもさうじや無いかと云ふ人もありませうが、私が茲に云ふのは、そんな曖昧なもので無くして、病の性質がどうしてもさう出來て居る、肺病のやうに治療の方法さへよければ殆んど百人が百人まで癒ると云ふ質の病氣とは違つて、前にも云つた通り癌腫などの出來たのはどんなことをしても癒らぬ、然し普通の

心臓病であつて、然も適當の時に適當の療治をすれば癒るものである。

それから此病に特有のものは、癒ると癒らぬとの中間にあるものである、一体辨膜障害と云ふは、今健全の心臓にあつては、血液が左室から動脈に出て行く時には、左房と左室との間にある辨即ち僧帽辨が蓋をして血液が左房内に逆流するを防ぐのであるが、僧帽辨閉鎖不全にあつては此辨が短かくなつて居るので充分に房室の間を閉鎖することが出來ぬのであるから、此辨の短いのはいくら藥を飲ましても、これを元の通りに長くすると云ふことは到底不可能のことである、然らば不治かと云ふに、

これはまた決してさうてはない、心臓には代償機能と云ふものがあつて、此僧帽辨閉鎖不全の爲に受くる處の損失を償ふて餘りある處の働きをするもので、これが適當の治療によつてよく其機能を發揮して心臓に故障無き人と同樣の働きをなさしむるのである、けれども其閉鎖不全其物は決して全治したので無いから、全く癒つたとは云へない、けれどもまた病氣の無い人に違ひ無い丈けの働きを心臓がするのであるから全く癒らぬとは云へぬ、即ち解剖的には不治であるが、生理的には全治である、これは思ふに造物主が、心臓の如き大切なる臓器に向つて殊に設けられたる妙技と云つてもよからうと思ふ。

學理上より嚴密に解釋する場合には、心臓病の豫後に對して上記の如き三種の結果を來たすが、通常不治の症、つまりどうしても生命にかゝると云ふ心臓病は尠くして、其大抵は癒る、よしまた癒らぬにしても心臓固有の働きが差支無いやうになる、即ち事實に於ての全治は非常に多いのであるから、心臓病に罹つたからとて、落膽せずに、失望せずに適當の治療を加へると云ふことが何寄のことである。

○代償機能の説明

此處て少しく代償機能のことを説明しませう、代償機は又調

節機能とも云つて、心臓は自家の機能を防害する原因に勝て其防害に起因する血行の異常を平均せんとする力が頗る盛んなものである、實際幾多の心臓病に於て其徴候が顯然たるにも係らず、其續發たる血行障害の起らぬは屢々實驗する處であつて、これが即ち調節機能を起せる爲めである、そして此調節機には二種の別がある。

第一は心臓の收縮強盛して血行の異常を平均するものであつて、心臓病のために血管内に充分の血液が射入することが出來ない場合に當つて、心臓の收縮が常よりも強くギュッと起つて、其不足を補ふものである、この機能は深呼吸によつて大に

其作用を逞しうするものである。

第二は、心臓の筋質増殖する、即ち心肥大を起して以て血行障害を平均するものである、心臓病にあつて胸部の突隆するは重もに此肥大のためである、そして此肥大は心臓の障害ある部分によつて異なるものであつて、心嚢癒着にあつては全心に、肺動脈孔狹窄に在ては右室に、大動脈孔狹窄に在ては左室に、右房室孔狹窄に在ては右房に、大動脈辨閉鎖不全に在ては左室に肺動脈辨閉鎖不全に在ては右室に、三尖辨閉鎖不全にあつては右房に、左房室孔狹窄及僧帽辨閉鎖不全に在ては左房及右室後亦左室に發するものであつて、これによつて心臓の能働力を

高めて以て、病氣の爲めに起りたる障害を充分に平均し、血行常を違はず、以て其人を常に爽快ならしむる許りで無く、又運動をも爲し得べきに至らしむるものである。

されば心臓病の治療法としては、其病氣の根本に溯ると同時に、此代償機、調節機を助けて、完全に其機能を全ふせしむるのは唯一の眼目である。

○心臓病者の攝生法

一　榮養療法

何病氣でも病氣に罹れば滋養物を多く攝らねばならぬが、殊

に心臓病にあつては其心要が多い、といふのは心臓病者に取りて最も大切なのは前にも云つた代償機能であるが、この機能を満足に果たさしむるには、どうしても滋養物を澤山に攝らねばならぬ、身體が弱はると其反對に病氣の方が重くなるから、成るべく消化れ易い滋養分に富んだ食物を程よく取り、苟且にも暴飲暴食すること無く、食事の時間は一定して間食せぬやうに注意し、力めて胃腸を強壯健康ならしむるがよい。

滋養物と云へば世人は多くは牛乳、鷄卵、スープと心得て居る、成る程此等のものも滋養物には相違無いが、我々の平素用ひ馴れ食ひ馴れて居るものにて滋養分は澤山に含まれて居る、

私は何分弱いから牛乳を毎朝二合づゝ用ゐて居升など云ふ人はよくあるが、牛乳を用ゐるのは無論結構なことには相違ないけれども、朝起きると直に牛乳の一合なり二合なりを飲むと、それが腸にこたへて朝の御飯は充分に食べられなくなる、いくら牛乳を飲んだ處で牛乳一合は御飯一膳だけの滋養分か無いから、斯樣のことでは折角餘分の滋養分を取る積りのゝが反つて少く取ることになるから、牛乳を用ゐるなら、御飯を充分に食べた後に、食後の茶の代りに用ゐると云ふ風にすれば、一合でも五勺でも飲んだ丈けは餘計滋養を取つたことになるから此等はよく〳〵注意すべきことである。それから魚鳥獸肉其他何ん

ても自分の好む處のものを充分に取るがよろしい、魚肉は必ずしも指身ならずとも胃腸さへ強壯なれば煮て食はうが、燒いて食はうが一向に差支が無い、豆腐や薯蕷、百合なども多大の滋養分がある、兎に角食物の種類は何でもかまわぬから成るべく新鮮のものを用ゐると云ふが何寄の注意である、滋養と云ふことに誤解せる人多き故特に細説して置く次第である。

二　飲酒、煙草の害

酒と煙草は養生に害ありとは昔ながらの金言であるが、殊に心臓病には大毒物である、酒や煙草を用ゐると動悸が劇しくな

り、呼吸困しくなつて、其結果代償機能を破り病勢を進めることになるから、少しても心臓に故障のある人は決して用ゐてはならぬ、麥酒を鯨飲する獨逸人には「ビールヘルツ」と云ふ心臓病があり、煙草を多喫する土耳古人には「ニコチンハート」と云ふ心臓病がある位で、健康な心臓を有する人でさへ、此等を多く用ゐれば遂に心臓を害することになるから、況して故障のある心臓に此等のものゝ害あるは細説するまでも無いことである。

三　茶、コーヒーの害

茶やコーヒーなどは飲んだ處は酔ふでもなし、何んでも無いから無論病氣には障るまいと思ふ人もあるであろうが、處がなか〳〵障りがない處か多にありて、茶やコーヒーを澤山に飲んだ爲めに心臓に故障を來たした、即ち茶の過飲から起る心臓病がある位に、心臓に向つては害のあるもの故、成るべくこれを避け若し已むを得ざる場合には番茶の焙じたのを少し用ゐる位に止めて置くがよい、茶と心中した所でつまらない話であるから注意せねばならぬ。

四　刺戟物の害

刺戟物と云ふは、唐辛子、胡椒、ワサビ、山椒、芥子其他總て辛味を有するものゝことであるが、此等は吸收されて血中に入れば、心臓を刺戟して其鼓動を高むるものであるから矢張禁物と心得ねばならぬ、辛味はよく人の嗜む所で、指味にせよ、吸物にせよ、または西洋料理など常に食物には附き勝のものであるから、ツイうつかりして食べて了つたなど云ふ申譯は、病氣の方ではチッとも聞いて呉れないからよく〳〵注意か肝要である。

五　入浴の注意

心臓病者はまた入浴に就て注意すべきことがある、江戸ッ子風に、熱い湯にいきなり飛び込むなどは、丁度陶器を熱湯に入れると同様で、忽ちピンと來る、生命にかゝる、よく湯屋で卒死する人を聞くが、此等の人は酒客にあらざれば心臓病者であるから入浴殊に熱湯に入るなどは、猪、武者のすることであつて、苟くも生命を愛する人のなすべきことではない、然らば心臓病者は入浴してはならぬかと云ふに決してさうではない、成るべく微温湯に注意して長く入浴らぬ様にするならば差支は無いが、此場合に於てもいきなり湯槽に入る様のことをせずに、先づ湯を汲みて全身に萬遍無く漑ぎ、男子ならば頭髪をも洗ひ

て、さて後靜に入浴るがよろしい、そして入浴時間も餘り長さに失せずに成るべくは二度位入浴つたら上るやうにして、湯上り後は暫く休息するがよい、若しまた身體に浮腫が表はるゝ樣になつたら決して入浴してはならぬ。

冷水摩擦、冷水浴、游泳、海水浴などは何れも禁物であるが、冬季嚴寒の候にあつては、乾布摩擦と云つて、朝起る前にタオル（西洋手拭）を以て皮膚を靜かに摩擦するのは元より差支が無い。

六　房事を愼め

心臓病者は房事を慎まねばならぬ、出來得るならば堅く禁ずるが宜しい、房事に際しては心臓皷動の劇しくなるは誰人も實驗する處であらふが、此動悸の亢まると云ふことは心臓病には禁物である、それに房事は男女の心身を消耗するもの故、此等の點より云ふも矢張宜しくない、支那の諺に腹上死と云ふことがあつて、彼等は「死なば腹上死」と云ふことを言つて居る、丁度日本の諺の「死なば卒中」と云ふと同樣である、腹上死と云ふは交接中に卒死することで、これはよく心臓病者にあることである。

心臓病、結核の初期、脚氣等に罹ると無聊の爲めか、兎角荒

淫に耽るものが多いとは醫家の一般に唱ふる處であるが、此は甚だ有害なことであるから、有配偶者と雖も決して淫に荒んてはいけない。

七　結婚に就て

既に房事が心臓病者に害ある以上は未婚の男女は一生獨身生活を送らねばならぬと云ふ決論は、勢ひ生じて來ることになるが、若し情を忍んで獨身生活を送ることが出來れば誠に結構であるけれども、人によりては元より結婚も敢て妨げない、生計が豊かで精神は堅固に、意志も頗る強く、結婚後生計上の煩ひも

無く、妻を娶つたために一層心身を勞すると云ふ氣遣ひのないと云ふ人で、房事を愼み決して淫に耽らぬと云ふことであつたら結婚を許してもよい。

併し女子にあつては男子と大に趣きを異にするものである、假りに房事の身體に及ぼす影響は男女共に同じことであるとしても、姙娠とか分娩とか云ふことは獨り女子のみ負ふ處の重荷であつて、彼の懷姙十月苦難言の言葉の如く、一旦胎内に宿つてから勇しい呱々の聲を聞くまでの婦人の苦痛は實に言語に盡し難いものである、健康の婦人でさへ斯くの如くであるから況して心臓の弱い、惡い婦人はどうしてこれに堪ゆることが出

來やうぞ殊に一ヶ月二ヶ月と胎兒が生長し行くに連れて母の心臟は益々活潑に働いて胎兒の營養を供給して行かねばならぬから仲々困難である、ある產科醫の統計によれば重い心臟病の婦人が姙娠若しくば分娩の爲めに死亡するのは、一百人につき約四十人の割合であると云ふことであるから、心臟が惡いと思ふ婦人は結婚は餘程考へ物である、少くとも適當の治療法を講じつゝあるにあらざれば後に至つて悔むことが無いとも限らぬから、どうしても結婚せねばならぬと云ふ人であつては適當の治療を施すを條件として結婚するがよいのだ。

要するに交接作用なるものは心臟に影響を及ぼすことは大な

るが、これが健康者であればさして甚しい障りは無く、多少の疲勞を來たしても再び速かに恢復するが、心臓病の患者では其恢復はなか〳〵困難であつて、一度打ち始めた動悸は容易に納らぬものであるから、呉々も注意を要する次第である。

八　運動に就て

健康な人は運動は成るべく盛んにやつた方が宜しく、少くとも一日三回は汗を流した方がよいと云ふと、運動の盛んな人程身體は強壯になるが、之に反して心臓に故障のある人には運動は禁物である、尤も禁物であると云つても唯室内にじつとして

居る許りでは反つて宜しくないから、動悸の出ない限りの運動は元より差支が無い、これにはブラ〳〵歩きの散歩、園藝、鶏を飼ふなどが良く、殊に已れの好む花卉を培養するなどは最も可い、また鶏か家鴨を飼ふは唯に體の運動と、精神の慰安を保つ許りでなく、其肉卵はまた食用として大に滋養の効ある故此等は所謂一擧兩得である、ろして若し出來得るならば都會雑閙の地を避けて、刺戟の少き山水の秀麗なる田舍の地にありて、此等の自然と親しみつゝ悠々自適静養するが何寄の攝生養生法である。

九　感冒と便秘

心臓病にかゝればイキムと云ふことは禁物である、イキムと云ふことは故意にやる外に病氣の爲めに餘儀無くすることがある、イキム病氣の主なるは感冒と便秘とであるが感冒の爲めに氣管枝加答兒を起した場合、其他總て咳嗽のある病氣は非常に努責を要するもので、爲めに心臓病に禁物なる動悸を亢むることになるから、一寸した感冒、または少しても咳嗽が出る樣であつたら早く治療を加へねばならぬ。

便秘はまた單に腹部を緊張して努責勝になる許りでなく、また腹内に欝血を起すので何れも心臓に害を與へるから、便秘ある場合には早くこれを通ぜしむるがよい、便秘にはカスカラ錠

を服するもよし、またはグリスリン灌腸を施すもよいが、常習便秘の人にあつては毎起床後冷水一椀を服すると妙に通じをつくるものである。

一〇 深呼吸は心臓を調節す

深呼吸の心臓調節機能に効あるは先にも述べたが茲では何の爲めに効あるかを説明しませう、一體我々の體内には胸腔と腹腔との間に一枚の横隔膜と云ふ膜がある、處が深く空氣を吸ふて腹腔内の内臓は下がり、共に横隔膜も下るから、心臓が擴がるに其區域が廣くて誠に都合がよろしい、それから今度は呼氣

の時には強く空氣を吐くと其れと同時に横隔膜も胸腔に上つて來るから心臓は強く収縮する、心臓は吸氣時に擴張し、呼氣と共に収縮するから深呼吸は非常に効のあることになる、それから深呼吸に今一つの効は腹内諸臓器を強靭ならしむる故、運動或は疾走等の際に横隔膜がピンと強く張つて居るから心臓は常に己れの位置に安静さるある故決して動揺せぬ、從つて動悸も亢まらなければ、呼吸も切れぬ。身體虚弱なる人が少しく運動しても忽ち動悸の亢まるのは、此横隔膜の緊張力が弱い爲めに、タブ〳〵と動くから從つて心臓も動揺することになる、處が常に深呼吸を行へば此反對に少し許りの運動では心臓が動揺

せねやうになるから、延いて心臓病養生となるのである。

序ながら深呼吸の注意を少しく擧げんに、息を吸ふ時は先づ空氣を鼻より入れ胸を通して上腹より下腹に入る樣にする、即ち息を吸ふときは下腸が平常より少しく前に出でゝ、且ついくらか固くなる樣に心掛くる事である、併し腹を固くしやうと思ふて無理に喉の息の通を閉ぢて、顔に血の逆上する樣にいきむ事は宜しからざることである、それから息を吸ふ時は成るべく長く自然に吸ひ入れる事が必要である。息を吸ひ終つたときは、直ちに之を吐き出さずに少しく静止休息の時間を置く樣にし、其より自然に長く、息を臍下より、胸を通し、鼻へ吐き

出す樣にする、此時には下腹は平常より少しく低くなり、且つ少しく固くなる事か必要である。息を吐き終らば直ちに又吸ひ入るゝ事なく其間に僅かの靜止休息時間を置く事が必要である、ろして此樣に出入の息を數回反復する、一分間に凡四息、一回の練習時間は三十分、即ち百二十息内外を以て終りて休息する、之れを一日朝夕二回、若しくは朝、午後、夜間の三回試むるのであるが、其回數と一回の息數とは各自の根氣次第である。

一一　精神の安靜

精神作用と心臓の作用とは切るに切られぬ特別なる深い關係を持つて居るものである、假へば思ひも設けぬ吉報に我を忘れて悅ぶ時、他人から惡口されて憤怒の焔一時に燃え立つやうな時、其他悲しむ時、樂しむ時、愛する時、哭する時、惡む時、苟くも七情の動く時には、心臓の働きが劇しくなつて、俗に云ふ胸の内が早鐘をつくやうになるものである。されば心臓のことを英語では「ハート」獨逸語では「ヘルツ」と云ひ、又我日本にては「心」と云ふ文字を用ゐるも誠に故あることで、よし精神作用は胸中にあつても、情は胸の中にあると云つても何の差支がない譯である、斯樣に心臓と精神作用とは密接なる關係

がある故、心臓病者は力めて精神を安静にする必要がある、從つて稗史小説、演劇、寄席等苟くも七情を刺戟することを避け、苦勞心配はサラリと捨て、假令氣にかゝる事があつても、ナニ、氣を揉むには當らぬと我と我身で打ち消す樣にし、氣に喰はぬことを見、癪にさわることを聞いても、眼は素通しの眼鏡なり、耳は容れ物なりと觀念して、苟くも心を取り亂さぬ樣にするが何寄の注意である。

一二　轉地療養

轉地療養は亦た心臓病者に効あるがよく其處を撰ぶの必要が

ある、海岸などは餘り良い方では無く、山間又は田園が適する東京附近ならば冬は箱根の溫泉地、夏は日光、鹽原、輕井澤、伊香保邊が宜しい。

一三　最も注意すべきこと

病氣にして攝生の必要なきものはないが、殊に心臓病に於ては最大の必要を感ずる、腸胃病者の如きは飲食物さへ注意すれば他は格別なる攝生も要せぬが、心臓病はなか〳〵養生は餘程面倒である、以上述ぶる處十二項は其注意の大體を記載せるに止まるが、此十二項を總括して云ふ、即ち心臓病者に最も大切

なる養生法と云ふは、一言にして云へば動悸を亢めるなど云ふことである、動悸を亢むるのは心臓自身に害ある許りでなく若し血栓の出來て居る人であると、彼恐るべきエンボリーを起すことになる、されば以上述べた處は勿論何事に係らず、總て動悸を亢むる事は心臓病には大毒と心得てこれを避くるが攝生の秘法である。

○心臓病の治療法

心臓病の養生法を長々と記載し來つた余は最後に其治療法を述ぶるの必要に迫つて來たのであるが、治療法は一言以てこれを云へば**キユール錠**を愛用するに止まる、一語甚だ簡單であるが、此一語中には實に千萬無量の意味を含蓄して居るのである、此小著を始めより讀過せられたる烱眼なる諸君にありては業に既に心臓病の何物たるを知ると共に、如何にしてこれを治療すべきや、即ち治療の方針は如何に定むべきやを略々知られたるならんと信ずる、實に心臓病治療の大方針は「心臓を強壯にするにある」と云ふ一事に止まる、勿論何の病氣にせよ其病める臓器が強壯になれば即ち全治には相違ないが、心臓には他の臓器に異なる所の代償調節機能なるものある故、心臓を強壯にせしむるは即ち病の根本に溯つてこれを驅逐する、若しま

た辨膜に甚しき缺損ある場合にはこれを補綴することは能はざるも、藥物固有の作用によりて、例の調節機能を完全ならしめて以て、心臓をして無病健全なる人と同様の作業を爲さしめ、其人をしてよく天壽を保たしめ、事業を成就せしめ、其目的を達せしむる靈妙偉大なる業蹟を呈せしむるものである。

心臓の強壯藥と云へば、實芨答利斯葉なる藥物は内外の醫師に賞用せられたものであるが、此藥はなか〳〵効力あると具に、一方には蓄積作用と云ふて、十日なり二十日なり服用せる所の藥物を一時に顯はすと云ふ甚だ危險なる副作用を呈することもあるもの故、安心してこれを用ゐる譯には行かぬが、我キユール錠は或一の私藥により調製せるもので、此私藥は余が多年

の苦心により發見し幾多の心臓病者に試みて奏効し、また内外幾多の學者に試用を求めて其賞賛を得たるものにて、實芨答利斯の如く危險なる副作用なし、而も能く回春の効を奏するものであつて、現代に於ては唯一の心臓病藥である、されば痛ましき心臓病者も此靈藥を服用しつゝ、よく上記の養生法を嚴守せば古來不治の症と稱せられたる心病も朝日に向ふ露と同じく消え失せて再び愉快なる月日を送るを得るは必然のことであつて、是は獨り此キユール錠を服する人にのみ受けらるゝ處の特點であるのだ。

最新心臓病治療法 終

⊙キユール錠藥價

▲壹百錠　金壹圓
▲貳百貳拾錠　金貳圓
▲參百五拾錠　金參圓
▲五百錠　金四圓
（全國送料不要）

注意
（清、朝、樺、臺灣は送料參拾錢を要す
代金は凡て前金の事
但し代金引換小包は謝絶す
切手代用は二割增の事）

▲僅少の金を惜みて貴重の生命を失ふ勿れ
▲一日の手遲れして百年の悔事を殘す勿れ
▲藥は思ひ立たる時求むる事を忘るゝ勿れ

キユール錠申込所
東京市芝區愛宕町二丁目六番地
博愛藥院　小倉彌太郎
電話芝一八八一番
振替東京一六六六六番

大正元年十一月一日印刷
大正元年十一月三日發行

不許複製

編輯兼發行者　東京市芝區愛宕町二丁目六番地　小倉彌太郎
印刷者　東京市芝區櫻川町十七番地　山田三次郎
印刷所　東京市芝區櫻川町十七番地　山田活版所
發行所　東京市芝區愛宕町二丁目六番地　博愛藥院

270
537

終